

随想

思い出しの食べ物 (その四)

—へおふくろの味・佐伯の味—

鎌倉在住へ佐伯中学33回生

会員 神野 幸人

④ 渋柿

国木田独歩の「實後の国佐伯」の中に、

「秋晴れて小春来り、葉落ちて果実残る。山にかくる
五軒家水に望む遠村、遠く望んで目につくも乃其の
赤き星なり……佐伯は実に果実の古城なり。此地に
城山なく、番五川なくとも、猶且此の柿だにあらば以
て再遊、三遊、四遊するに足る……」

と。佐伯には柿が多い。

中村のわが家の庭には、渋柿の大樹が五六本あった。

三年に一度は枝もたわわに実をつけた。二斗樽に詰める。

四、五日すると渋が抜けて甘い柿となる。樽底に溜った
液は、瀬川齒科医の隠居さんの、釣糸用に提供する。

採り残された柿は、熟して烏の餌となる。

⑤ キンカン・ザク口

庭の片隅に、キンカンとザク口があった。

キンカンは、小さな実をつける。黄ばいた実皮を蓋で
むいて、半透明の種子を包んだ中味を、パイと口よりほ
じき出す。

赤と白の花は花びら、赤い花は実がくろ。堅い皮の
中に、色水崩を並べたような小さな種がある。トウモロ
コシの種子をとるようには、ホ口ホ口と掌はどり、口に入
れる。

「人間の味がする」と……。

水晶体がはじけて、すっぱい味が口に広がる。

秋空に、巻雲が高い。

⑥ ハゼ

改新川に、柳と榎が数本覆いかぶさるようには茂った延
に、農田の家があり、真つ悪に焼かれた板塀の中には、小
極が眼光鋭い古武士の風格のおじいさんがいた。

秋になると、木の根っこに床尾を置き、腰を下して竿

を二、三本垂らしてハゼを釣る。十七子から十五センチ程

のハゼが、催眠術にかかったように、音もなくつり上げ
られた。

軒下に藁の束が下げられ、串に焼かれたハゼが、よ

うに刺されて、西日を受けてそよ風にゆれていた。

われわれも、ハゼ・ドンコなどよく釣ったが、母はあ

まり好きでなかったらで、食卓に出ず、雑入餌となっ
ていた。

⑦ マテ貝・シヤコ・東海老

中川と内所川が合流して本流となり、佐伯湾にそそぐ。

その川中が広くなった所は、汐の干満により中洲が出来

る。干上がった砂地にはシオマネキが小さな穴を掘り、穴

の周りに貝殻から運び出された土が、仁丹粒ぐらいに丸

められ、小さな山をつくっていた。

その砂地に、鎌を引きながら表をけずって行くと、蟹
の空より大きい穴がある。その穴に持参の塩を少量落と

すと、マテ貝が飛び出して来る。救かい設は縦に長く、異常に奈達した水管は反褐色に変色して、護から長く飛び出してゐる。濃度の濃い塩分に驚いて、水を吐いた拍子に、口ケツトより穴より飛び出すのを。

時折、車海老が極跡からピンピンと跳ねる。砂色に保護をしておいて、二度三度跳ねる力で発見は易い。夜釣の餌にシヤコを握る。敏で砂地に穴をほり、溜った水をバケツで汲み出す。まわりの砂がバサリとこわれぬ。水が湧く、水を汲む。これを繰り返すと、水溜まりに汲み出された水は、五センチ程の淡黄色、背の曲った小さいシヤコが足をばたつかせている。

これで釣った。チンキは、青みの多いネギを入れて吸物になる。

④ カキ

海軍橋が出来る前（昭和十年架設）、木製の橋があった。その橋桁にはカキが一杯ついていた。カキとり専用道具（一尺程の小枝に、毎釘を一本打ったもの）と、ガルを用意して小舟に乗って取る。潮水と寒風で、アカギレとヒビが血を出している。

この小指の爪ほどのカキは吸物となる。カボスをしほって入れると、一段と味がよかった。

⑤ 岩ノリ（アマノリ）

海軍橋の桁に、また岩に、黒褐色のノリがつく。佐伯地方では、アマノリ。と言っていた。

つるりつるりと滑る岩の上、カキの殻や貝の殻で手を切り血が流しながら、ヒビ・アカギレの痛さをこらえながら、根気よくはかす。ガルに大分たまると、潮が満ちて来る。

翌朝の味噌汁は生海苔である。コシコシと張りのある歯ごたえ、又ルリとした甘い感じ。南国佐伯の冬も、朝は寒かった。

カキとり、岩ノリとりで荒れた手は、洗面器にぬるま湯を入れ、手をしばらくつけ、鉄瓶の湯を徐々に入れて温めた後、竹の皮に包んだアンマ膏を、細く糸状にしてアカギレの穴に入れ、焼火箸をあててとかし、障子紙を切って貼り、その上からまた焼火箸でならす。ヒビの手は、前述の牛の脂をぬるか、ベルツ水をつけていた。

⑥ 白魚

雪のない佐伯の冬もようやく終り、番匠川の流氷がぬるぬると、中川の河岸に塩垣が出来た。

その塩垣に、身を寄せようとして小舟をつなぎ、頬かぶりしてキセルをくわえた、綿入れの防寒着を着たおっさんが、静かに水面を見ている。油をしみこませた布をつけた竹竿が、時折水面をなでる。波一つない川面は鏡のようになり、波風をよけて集まった白魚が見える。おっさんの目がかがやき、腕を三方に伸ばした竹に張られた綱が上げられる。トコロテンに一点インキを落としたような白魚が、綱の中で跳ねている。

この魚は、死んで白くなる。味も値段も半減する。この吸い物は美味である。昔から高価だったのか、一念拵で計られて売られていた。今日は、全くその姿なしという。残念である。

⑦ バクダンアらし

芳島の家は近くには、内田製材所と安倍製材所がある。

た。安部製材所には福美兄と同級生の亮次兄、そして小生と同じ年の智恵子さんがいたので、よく遊びに行つた。ある夏の日、四人でお櫃一杯のバクダンアラレを食べて、小母さんに吐られた。そこで板の間にかくれた。おときの小母さん及恐ろしかった。

小生、五才位の頃。

⑤ 馬ん瓜

芳島の対岸の中須賀には、松下・軒・小夜・日野と、親しい家が並んでいた。松下は郵便局職員、幸は所役場兵事務係、小夜と日野は親爺と同業の船大工だった。小夜と幸との間には大きな柳があり、枝は川面まで垂れ、その根元には怪メドリ程のコンクリートの枠の井戸があり、小さな口からは真水がいつも流れて出ていた。

夏の日、小夜の斎坊へ小生より五、六才年よ日は、船大工の仕事と終えりとザンブと水泳、川の中央で立泳ぎ、そして足先で貝を掘っていた。浅瀬より二週り程大きく、殻が悪い貝だった。おれわれはそれこそ「馬ん瓜」と呼んでいた。おれが家で食しなかつたが、都会の寿司屋でこの水に似た貝を見かける。

⑥ キンナン

父成寺のセイシヨコさんへ清正公の廟の後ろに、大きな銀杏の木が二本あった。学校へ運動会もおわり、黄色い葉が落ちる頃、梅の宴に似た黄楊色の葉が道に落ちる。異様な臭気、またその汁が手にでもつくとかぶれるので、長靴を履き、皮をこしこしと踏みつぶし、長い竹箸でつまんで、バケツの中で水洗いとしてキンナンを採つた。しかも若い者が食べるほど、おれが出来ると言われて、食べさせてくれたかった。

⑦ 梅干し

紫蘇(シソ)は佐州では千石というが、きいた真赤な梅干が、弁当に二、三個入っている。その皮の状態で種の中の実の良否を判断する。

子供は頃は、梅干の中実が葉になると、必ず歯で割って食べていた。近頃は齒も年とつたか、梅干を割るに力をかけるようになった。

⑧ おもゆ

おきひらの蓋がかたかたと音をたてて、七輪に白い湯がこぼれる。取った蓋に白い膜がつく。「この薄い膜が、オブラートの素だ」と母。

麦飯の毎日だが、寂気のとときは、おもゆに梅干、お粥に梅干であつた。

おきひらでつくるおもゆ、お粥はおいしかった。今もおきひらを見かけず。何故だろう。

⑨ 七面鳥

中村の家の近くに女学校があつた。(今市役所になる) 堀之内眼科方面が正門で、出納の家に接した方は、蒲柳の生垣で囲まれていた。その生垣の一部をくぐって侵入、テニスの玉を拾つたり、運動場でボール投げをして遊んだ。

校舎のはずれに寄宿舎があつて、お姉さん風の女学生が寄宿して自炊していた。寄宿舎と講堂の中庭には藤棚があり、その一隅に雞小屋があつて、七面鳥が二、三羽いた。赤い布を見せると翼をふくらませ、尾の羽を扇かのように立てて広げ、ギーギーと音を出して、おれを逆立て、おれが下まで垂れ下げた鶏冠を、真赤にして怒

ったものだ。

その七面馬が卵を産んでいる。砂の上は二個、うずらの卵の大型を。盗むことにした。竹竿の先に針金で梳型の網を取付け、雞小屋の金網をぐいとひるげて小屋の中。初秋の夕暮れ、蚊が手足を刺す。寄宿舎の人々に見つからんように、うまくいった。手にとった感触は良かったが、母に叱られて食はず。(昭和十一年頃か)

⑤ 色紙饅頭、やぶれ饅頭

佐伯湾から川をさかかたびって城東橋をすぎ、太平橋の橋もと、土居丁の船着場の付近には、料亭明月・江藤米店・浅利製網所・清家荒物店と、豪壮な商店が並び、その広場には出店が出ていた。その一つは色紙饅頭(おれおれは数鳥饅頭と呼んでいた)と、やぶれ饅頭(茶湯を薄皮饅頭)を売る店があった。蒸籠に入れられ、湯気に蒸されていた。

子供の頃食べたときは非常にうまかったが、五六年前大手前のバス停近くで食べたが、昔の味はなかった。口がおこったのか?

『佐伯市史』によると、色紙という名から歌を連想し、七色手ぐらいの形も、紅白の漆分竹模様のともり上品で、きあめで風雅で、獅子のものが祖先の人たちが、よくもういいう種致に富んだものを創作したものだと思う。

戦前までは船頭町池船橋畔に、このまんじゅうを売る店が十軒近くもあった。浦辺の人が、一つ一銭五厘、十銭ぐらいの竹の皮色みき、土産に買って帰るので繁昌したものである。

一晩おくと堅くなるが、朝飯をたくとき、出来たてのご飯の上におくせとおくと、才たもとで戻る。

今日は萎むし、惜しいなあ。(注:あるにはあるようです編者)

⑥ 白柿煎餅

中村には熱心な真言宗の信者がいて、お大師さんの日にお接待をする。お家が日蓮宗だが、子供は信仰には関係なく、その日を覚えていて、お接待をする家には朝早くから行く。

大てい一斗鐘に入れたてあるお菓子を数個いたたく。そんな家と四五軒ある。

そのお菓子の中には、必ずあったのが白柿煎餅である。砂糖としようががピリリときき、独得の彎曲した形、この頃の佐伯には、城下町の名残りがあった。

その中の一軒、官斎蠟燭屋は今も昔のまま残っているが、その風習はもうないだろう。

何時であつたか、大手前の潮谷寺で、この白柿煎餅と貰った記憶がある。『佐伯志』によれば、朝谷寺は浄土宗である。真言宗は大日寺であるから、あるいは小生の幼い日の記憶がいかも知らない。

この風習、『佐伯志』にも『佐伯市史』にも記されていないとみると、中村の一部にのみあった風習かも知れない。何時か古老に聞いて見たい。

⑦ ザボン

利光の家の前に、ザボンの木が一本あった。三三軒の家の中であって、主がなかつたのか、このザボンの実を取って、叱る人はなかつた。

南国佐伯でも、ザボンにとってはお寒かったのか、大きい実は出来なかった。そして、ピンク色したふわふわの中の実は、おまりうまくはなかつた。(つづく)